

週刊新潮 [2024年3月28日号] のグラビア面に『東日本大震災から13年 語り継ぐ「フクシマ」』の一コマとして『できなかった卒業式 震災遺構「浪江町立請戸小学校」』が紹介されていた…



東日本大震災から13年

# 語り継ぐ 「フクシマ」

原発事故によって、他のどの地域よりも困難な復興を強いられた福島県。あの惨事から13年、語り継ぐべき被災地の記憶を震災遺産から振り返る。

撮影 福田正紀

## できなかった卒業式 震災遺構「浪江町立請戸小学校」

▶▶▶ 双葉郡浪江町請戸 持平56  
2011年3月11日14時46分、震度6強の大地震が発生。当時、請戸（うけど）小学校の体育館では、5年生が3月23日開催の修・卒業式の準備をしていたという。3分後の14時49分、大津波警報が発令。5年生を含む校内にいた82名の児童は急いで1.5m離れた大平山に避難し、難を逃れた。体育館の壇上には実施されなかった修・卒業式の看板が、今もあの時のままに掲げられている。

## 校舎2階まで達した大津波

◎震災遺構「浪江町立請戸小学校」

▶▶双葉郡浪江町請戸持平56

2021年10月に開館した県内初の震災遺構「浪江町立請戸小学校」は、大津波と原発事故の爪痕を後世に伝える施設だ。被災した校舎内の惨状を見学することができる。あの日、請戸小学校を大津波の第一波が襲ったのは15時半過ぎ。津波は地上から3m以上の高さまで達し、学校一帯を呑み込んだ。校舎2階ベランダには津波の高さを示す標識が取り付けられ、自然の猛威をまざまざと教えてくれる。

**日** 本は、地震の恐怖に対して常に身構えていないといけない国である。この季節、まず思い出すのは、東北・関東地方に未曾有の被害をもたらした東日本大震災。なかでも原発事故という二重の災害をこうむった東電福島第一原発周辺に暮らしていた人々にとって、その哀しみは深く心に刻まれているに違いない。震災から13年を

過ぎた今なお、避難者は約3万人にも及ぶという。

現在、福島県内には、あの日を忘れないために新たに開館した13の施設があり、うち今回紹介する三つの施設が原発周辺の浪江町、双葉町、富岡町に置かれている。被災当時のままの姿を遺す建物や、地震発生から今日までの人々の営みを伝える写真資料、原発事

故を記録した映像、震災後に回収された遺品等々、いずれの施設にも展示されているのは、あの日を今に語るさまざまな「震災遺産」だ。その一つ一つが、被災地に生きてきた人間の「物語」を呼び覚ます。我々が何を反省し、今後も確実に起きるであろう大震災にいかに対応するべきかのヒントを伝えてくれる必見の記録である。



本日、東京新聞が配信した『福島初の震災遺構「請戸小」が訴えるものとは 大震災、原発事故の記憶をどう伝えていくか』を以下に転載させて頂く。「ひしゃげた窓枠、大きく破れた天井、泥だらけのオルガン、時計などを管理する複合盤は壁から引きはがされ錆びびている…。東日本大震災の津波の爪痕を生々しく残す福島県浪江町の請戸小学校が県内初の震災遺構に認定され10月から一般公開されている。児童たちは近くの山に逃れ無事だったが、請戸地区では津波で127人が亡くなり、原発事故で6年間、避難指示が続いた。震災や原発事故の記憶を後世にどう伝えていくのか。模索が続いている。(署名記事)

#### ◆「津波が来る」山へ走った

2011年3月11日の5時間目。請戸小の体育館では5年生が卒業式の準備をしていた。6年生だった横山和佳奈さん(23)の教室では、帰りの会が行われていた。地震が頻発しており、揺れが始まったとき、横山さんは「また地震だ」と素早く机の下に潜った。だがその直後、立ってられないような揺れが襲ってきた。机ごと体が激しく揺れ、床を滑る。叫んでいた子もいた。長い揺れが収まったとき「外に出るよ」と担任に言われ、ジャージに上履きのまま、横山さんは外に飛び出した。既に帰宅していた1年生11人以外の82人の児童が校庭に並んだ。請戸小の海からの距離は約300m。「津波が来る」と同級生の男児が叫んだ。「ラジオで津波が3mと言ってる」という先生も。約1.5km離れた大平山に避難することになり、高学年の子が低学年の子の手をつなぐなどして、余震で揺れる地面を必死で走った。横山さんが途中で振り返って海の方を見ると、もやがかかっているように見えた。児童を迎えに来た親もいたが、先生たちは「避難所で会いましょう。またはついて来ててください」と避難を優先した。避難車両で渋滞する道を何とか渡り大平山に。ところが登り口が見つからず、4年生の男児が知っていた道からようやく山に登れたことを、横山さんは後から知った。車いすの子は先生がおぶって登った。「自分が寒くて震えているのか、怖くて震えているのか、地面が揺れているのか分からなかった」。途中で津波のゴゴゴという音を聞いた児童もいたが横山さんの耳には風と木のこすれ合う音が後々まで残った。雪がちらついたことも覚えていない。



震災2ヵ月後の請戸小学校体育館。震災当時、卒業式の準備が行われていた。床は大きく段差ができ、津波で泥だらけになっている。=2011年5月、福島県浪江町で(陸上自衛隊提供)

#### ◆地元の友達に会いたくて…伝統の「田植踊」を続ける

山の反対側に下りると、道路が地割れしていた。寒さと不安でいっぱいになっていた時、通り掛かったトラックが乗せてくれることになった。その場にいた100人近くが荷台に乗り避難所の役場に。次々家族が迎えに来る中、横山さんの家族は現れなかった。横山さんの家は海のすぐそば。街中にいるはずの両親と弟は無事だと思ったが、家にいた祖父母は逃げられたのか。親が迎えに来ないのは横山さん含め2人だけ。不安が膨らむ中、電話で父親と連絡が取れ、親が迎えに来なかった友達と眠った。翌日、両親と弟と合流したが、祖父母の姿はなかった。そして請戸がどうなっているかを見る間もなく、原発事故の避難で浪江町津島、葛尾村、母の実家のある郡山市へと避難した。祖父母の行方はなかなか分からなかった。請戸に戻ればきつという、そう信じこもうとしたが、亡くなっていたことが後に分かった。避難後、地元の友達に会いたくて請戸伝統の「田植踊」を続けた。請戸訪問がなかったのは3年後。家は基礎と玄関の石畳だけになっていた。15mの津波は請戸小の2階の床面まで押し寄せ、1階は浸水し激しく破壊されていた。黒板にはたくさんの人のメッセージがあった。「やっと請戸これだ! 踊りがんばるよ!!」。そう書き残した。



請戸小学校の震災遺構の開館記念式典で、請戸地区の伝統芸能「田植踊」を披露した横山和佳奈さん(中)ら=福島県浪江町で

◆つらい記憶も後世に 請戸地区は災害危険区域に指定され、大半が住めなくなった。がれきが撤去され整備が進む中で、街があったことも消えてしまうと横山さんは危機感を覚えた。大学2年の時、町から卒業生として請戸小の保存について意見を聞きたいと打診された。町の震災遺構検討委員会に入り「請戸小さえなくなったら、どこに何があったのかも分からない。住民が帰ってくる理由もなくなる」と訴えた。請戸小の教務主任だった佐藤信一さん(56)も委員に。あの日、避難途中で街の様子を見に戻って見た光景が忘

れられない。「津波に街がのまれ、黒い海が広がっていた。津波や破壊された街で心に傷が残ってほと、児童に見せないよう必死だった」災害時、大平山に避難することは決まっていたが、山に入る道が分からなかった。もし入り口を知っている児童がいなかったらと思うとぞっとする。「一步間違えば、多くの犠牲を出した。間一髪だった。請戸小で津波を思い出し、つらい人もいると思う。でも地震や津波に遭った時どうしたらいいのか、それを伝えるためにも残すべきだと思った。児童が全員無事だったことも大きかった」検討委は、後世に災害の脅威や教訓を伝えるため、請戸小をできる限りそのまま保存し、震災遺構として公開すべきだとする提言を、2年半前にまとめた。委員の一人、請戸地区の区長で、震災後は山形と浪江で酒造りを続ける鈴木市夫さん(82)は「震災遺構として残ってよかった」と安堵する。自身や子どもたち、当時1年生だった孫も請戸小に通っていた。あの日、大平山に避難する途中、巨大な屏風びょうぶのような黒い津波がすごい勢いで山にぶつかった様子が忘れられない。役場で孫に再会した時は涙がこぼれた。「津波で街は無くなり、住めなくなった。請戸小が無くなれば大勢の人が住んでいたことも忘れられてしまう」



震災遺構に認定された請戸小学校の1階職員室。津波で壁から引きはがされた複合盤の前で鈴木市夫さんが当時を振り返った＝福島県浪江町で

◆「傷が癒えるには時間。悲しみに寄り添い、保存の議論を」東日本大震災で被災した建造物を、震災遺構として残すべきかという議論は各地で続く。多くの職員が亡くなり、取り壊された岩手県大槌町旧役場庁舎。児童ら大勢が犠牲となったものの、震災遺構として残った宮城県石巻市の大川小学校。被災建造物は震災の教訓を伝えると同時に、つらい記憶を呼び起こす。取り壊しか保存か、激論になることも多い。震災遺構に詳しい兵庫県立大大学院の室崎益輝教授(防災計画)は「何を伝えるために何を残すべきか。被災した建物を当時の姿のまま残すことで、災害の大きさや悲惨さを伝えると同時に、周辺を含め亡くなった方の写真の展示など、追悼や慰霊の気持ちが起こるようにすることも大事だ。後世のために行政や人間の過ちも残すべきだ」という。一方でつらい思いを抱える関係者の気持ちを考え、時間をかけて議論することも重要だという。「広島原爆ドームでも、結論が出るまで20年かかった。心の傷が癒えるには時間がかかる。人々の悲しみに寄り添いながら、保存する意義を話し合い、それなら残そうという気持ちになるのが大切。長い年月がたてば記憶は薄れ、関係者は亡くなっていく。後世に教訓を残すためには保存が望ましい」現在なみえ創成小(浪江町)に勤める佐藤さんは、請戸小を児童と訪れ教訓を教えている。横山さんは東日本大震災/原子力災害伝承館で語り部として体験を伝えている。横山さんは最後に必ずこう伝える。「災害が起きた時にみなさんに死んでほしくない。命を落とせば、周りの多くの人にも大きな傷が残る。だから安全な場所に逃げられるよう準備して、必ず逃げてね」

◆デスクメモ 多くの遺構が祈りの場に 数年前岩手県宮古市の震災遺構「たろう観光ホテル」を訪ねた。1階などの壁が流され柱がむき出し。案内してくれた親戚は当時を思い出したのか言葉少なく、津波の怖さ、地元の悲しみが伝わってきた。11日で震災から10年9ヵ月。多くの遺構が祈りの場になっただろう。

☒ 偶々今年3月に請戸小学校を訪ねたばかりであったので、上記の記事は心に染みた。  
<http://sismosocial.web.fc2.com/After10years2.pdf> (次ページ)を参照願いたい。

[注記] 上の東京新聞の記事は次のサイトに掲載済みのものをここに再録したものである。

<http://sismosocial.web.fc2.com/HigashinipponEQ189.pdf>

震災から10年目の2021年3月9日に初めて浪江町請戸地区を訪問する機会があった。



請戸小学校のタワー(左)と正面玄関(右)

## 浪江町請戸地区と 震災遺構・請戸小学校

3.11津波からの避難行動が以前から注目されていた。校舎は震災遺構に指定！



校庭側から見た請戸小学校校舎



請戸小学校から福島第一原発を望む航空写真と復興祈念公園建設現場



### 浪江町請戸小 避難の軌跡

「津波が来た瞬間、校舎の2階から避難した。避難先は、近くの山に上った。その後、山を下り、近くの集落に避難した。避難先は、近くの集落に避難した。避難先は、近くの集落に避難した。」

佐藤慎一さん

### 早く的確な判断、運も味方

津波が来た瞬間、校舎の2階から避難した。避難先は、近くの山に上った。その後、山を下り、近くの集落に避難した。避難先は、近くの集落に避難した。」

河北新報(2013年8月11日)の記事より



押し寄せた津波が校舎を突き抜け、かたがた破壊した請戸小。2011年5月、福島県浪江町請戸小(海上自衛隊提供)

## 浪江町請戸小 避難の軌跡

### 伝える

2011.3.11

津波が来た瞬間、校舎の2階から避難した。避難先は、近くの山に上った。その後、山を下り、近くの集落に避難した。避難先は、近くの集落に避難した。」

佐藤慎一さん

## 早く的確な判断、運も味方

津波が来た瞬間、校舎の2階から避難した。避難先は、近くの山に上った。その後、山を下り、近くの集落に避難した。避難先は、近くの集落に避難した。」

河北新報(2013年8月11日)の記事より

## 早く的確な判断、運も味方

津波が来た瞬間、校舎の2階から避難した。避難先は、近くの山に上った。その後、山を下り、近くの集落に避難した。避難先は、近くの集落に避難した。」

河北新報(2013年8月11日)の記事より